

学校名	佐賀県立金立特別支援学校	
1 前年度 評価結果の概要	<ul style="list-style-type: none"> 成果指標が達成できていない重点取組もいくつかあり、アンケート結果から課題がある項目を含め、検証を重ねて次年度以降の改善に向けて引き継ぎ取り組むことが重要である。 肢体不自由単置校として、教職員一人一人の専門性をどのように高めていくかは、学校としての課題である。 取組内容から成果指標、具体的取組、そして評価という流れが、あいまいで抽象的なものではなく、一貫性のあるより客観的な結果として表れる適切な内容となるように、計画作成の段階で十分に検討をしていく必要がある。 	
2 学校教育目標	<ul style="list-style-type: none"> 児童生徒の一人一人の状況(障害の状態、発達段階や特性)に応じた教育を実施する。 児童生徒が、「明るく」「正しく」「たくましく」生きていく力を育成する。 	
3 本年度の重点目標	<p>「夢に向かって ---- 明るく、正しく、たくましく」</p> <p>(1)児童生徒の主体性を尊重しながら、個に応じた教育を充実させる。 (2)自立と社会参加に向けて、児童生徒の夢や希望を大切に教育を充実させる。 (3)健康・安全教育を進めるとともに、思いやりや豊かな心を育む教育を充実させる。</p>	

達成度(評価)
A:十分達成できている
B:おおむね達成できている
C:やや不十分である
D:不十分である

4 重点取組内容・成果指標	中間評価	5 最終評価
---------------	------	--------

(1)共通評価項目				中間評価		最終評価		学校関係者評価		主な担当者	
評価項目	取組内容	成果指標 (数値目標)	具体的取組	進捗度 (評価)	進捗状況と見直し	達成度 (評価)	実施結果	評価	意見や提言		
											重点取組
●学力の向上	●児童生徒一人一人のニーズに応じた指導・支援による確かな学力の定着	OPDCAサイクルで指導や支援の方法をより良いものにし、個別の指導計画で児童生徒の前期経過及び学年末評価を向上させることができた回答する職員が75%以上	・ケース会において、複数児童生徒に関する複数の職員で指導支援の方法を相談し、共通理解を図る。 ・個人面談等において、学習内容や児童生徒の向上点を保護者へ説明する。	A	・児童生徒の実態把握を適切に行いながら目標や手立ての設定、評価を児童生徒に関わる複数の職員で相談・共通理解を図り、見直しを行った。 ・5、9月の面談時など機会があるときに、保護者へ児童生徒の成長を伝えている。	A	・目標が概ね達成できている。(教職員98%保護者100%)教職員は、実態把握を適切に行い、個別の指導計画に設定した目標を達成するために、ケース会や放課後等を利用して話し合いながら、手立てや支援について改善を行った。児童生徒の実態は、授業前や授業中、授業後など、日々変化していくため、より丁寧に実態を把握している。 ・保護者へは、面談や参観、登下校時等、機会を見つけて、学習内容や児童生徒の様子を伝えている。	A	・様々な箇所取り組みの工夫がうかがわれ、児童生徒・保護者・教職員の連携がとて感じられた。 ・児童生徒の健康状態、一人一人の学習程度、内容など違う中に、ICT機器を使いながらその児童生徒に合った授業をされているのを見ると、とても大変だと頭が下がる思いである。 ・引き続きPDCAサイクルを回して、より一層個々の児童生徒の実態に応じた効果的な指導、支援をお願いしたい。	教務	
	○教育の質の向上に向けた支援機器やICT利活用教育の充実	○ICT機器を活用し、効果的な授業の促進ができた回答する職員、保護者が75%以上	・タブレット端末、電子黒板等を対面授業やリモート授業等・集会活動で活用する。 ・児童生徒の実態に合わせて、音声代替装置等のICT機器利活用を推進する。	・タブレット端末、電子黒板等を対面授業やリモート授業等・集会活動で活用する。 ・児童生徒の実態に合わせて、音声代替装置等のICT機器利活用を推進する。	A	・目標がおおむね達成できている。職員の評価では95%、保護者の評価では93%がICT機器の利活用で効果的な授業ができているという最終評価が出ている。今後もICT機器の利活用を推進していきたい。	A	・目標がおおむね達成できている。職員の評価では95%、保護者の評価では100%がICT機器の利活用で効果的な授業ができているという最終評価が出ている。成果指数を上回る結果が出たことに満足することなく、次年度以降もICT機器の利活用を継続して推進していきたい。	A	・ICT機器の活用は効果的であるが、頼りすぎず、児童生徒の想像力低下に繋がらないような対応をお願いしたい。 ・ICT機器を使うことがいいと思いがちだが、一人一人の児童生徒にあったものを使うことが大事と思う。	学習・情報
	○児童生徒の夢や希望を尊重しながら、個に応じた進路指導の充実	○進路についての意見を十分に聞き、適切な指導がなされていると回答する保護者が75%以上	・教職員を対象とした進路研修会や保護者を対象とした進路説明会を行う。 ・個に応じた資料を必要に応じて作成し、職員、保護者へ提供する。	・教職員を対象とした進路研修会や保護者を対象とした進路説明会を行う。 ・個に応じた資料を必要に応じて作成し、職員、保護者へ提供する。	A	・教職員対象の進路指導説明会では、99%の教職員が参考になったと回答した。 ・「個に応じた指導を行っている」と回答した職員が100%、「適切な指導がなされている」と回答した保護者が96%であった。	A	・高等部卒業生の進路保障100%を達成した。 ・個に応じた指導がなされていると回答した教職員、保護者がともに97%以上であり、コロナ禍で制限があるなか、個別に対応しながら進路指導を行った。	A	・コロナ禍で高等部卒業生の進路保障100%は、教職員の方々のご尽力のおかげであると思う。 ・進路保障100%は大変だったと思う。本人・保護者と進路先を合わせるのは大変かと思う。	進路指導
●心の教育	●児童生徒が、自他の生命を尊重する心、他者への思いやりや社会性、倫理観や正義感、感動する心など、豊かな心を身に付ける教育活動	○心の教育活動や生命を尊重する教育に取り組むことができていないと回答する職員が75%以上	・道徳教育や特別活動、生活単元学習等で、思いやりや豊かな心を育む教育活動の充実を図る。 ・年間1回以上の交流及び共同学習や学校行事等で、他者と関わる経験を多様な体験活動で充実させる。 ・児童生徒会活動の一環として、嬉しかったことや友達の良い所をカードに書き出し、模造紙「えがおの木」に貼り付ける活動を行う。	A	・授業や学校行事等を通して、思いやりや豊かな心を育む教育活動に取り組むことができていないと回答した職員が99%と大きく数値目標を上回った。保護者も100%は、学校として思いやりや豊かな心を育む教育活動に取り組んでいると回答し大きく数値目標を上回った。 ・後期は児童生徒会活動の「えがおの木」に取り組み、思いやりや豊かな心をより一層育むようにする。	A	・職員の評価が98%、保護者の評価も100%と大きく数値目標を上回った。 ・全校朝会や児童生徒会、花いっぱい運動などの学部を超えての交流及び共同学習や学校行事等で他者に関わる経験や心を育む指導に繋がっていると思われる。 ・児童生徒会活動の一環として、「えがおの木」に取り組みんだことが、他者を思いやる気持ちの向上につながっていると思われる。	A	・コロナ禍で、対面の学校行事の内容変更で、児童生徒・保護者・教職員が信頼関係を築く難しさを感じられたかと思う。その中で、創意工夫の取り組みが非常に感じられ、とても意義がある内容かと思う。 ・えがおの木を見るのが楽しみである。	生徒指導	
	●いじめの早期発見、早期対応体制の充実	○いじめ防止等(いじめの定義、いじめの防止等のための取組、事業対応等)について、取り組むことができていないと回答する職員が75%以上	・学校生活調査を毎月行う。 ・いじめアンケートを年間2回実施し、教職員間で情報を共有する。 ・児童生徒会役員会で、毎月、児童生徒一人一人が頑張っていることを取り上げ、互いのことを尊重し、認め合う雰囲気を作っていく。 ・いじめに対する教職員の意識啓発のため、研修・会議を年間1回以上行う。	・学校生活調査を毎月行う。 ・いじめアンケートを年間2回実施し、教職員間で情報を共有する。 ・児童生徒会役員会で、毎月、児童生徒一人一人が頑張っていることを取り上げ、互いのことを尊重し、認め合う雰囲気を作っていく。 ・いじめに対する教職員の意識啓発のため、研修・会議を年間1回以上行う。	A	・いじめ防止の研修や学校生活アンケートの取り組みの結果、職員の評価は98%と数値目標を上回った。夏休みの研修も生かされていると思われる。 ・いじめ防止について保護者からの回答も98%と数値を大きく上回った。子どもの事で相談しやすい雰囲気作りが努められている結果が表れていると思われる。	A	・いじめ防止の研修や学校生活アンケートに取り組んだ結果、職員の評価は98%、保護者からの回答も100%と数値目標を上回った。いじめアンケートに取り組む際に教職員や児童生徒に啓発活動を行ったことが意識向上につながった。 ・児童生徒会役員会で互いのことを認め合う雰囲気作りもよかった。	A	・いじめに関する定期的な生活調査を毎月、いじめアンケートについても年2回の実施が行われており、早期の予防・発見に繋がっていると思う。	生徒指導
	◎児童生徒が夢や希望を持ち、将来の自立と社会参加に向けて意欲的に取り組もうとするための教育活動	○学校評価アンケートにおいて、それぞれの学部目標に対応しながら、進路に向けた取り組みができていないと回答する職員(と保護者)が80%以上	・小学部では、交流及び共同学習に積極的に取り組み、社会性を育てる。 ・中学部では、交流及び共同学習に取り組むとともに、将来の生活や生き方について、意識づけをさせる。 ・高等部では、交流及び共同学習、校外学習、就業・施設体験等を充実させ、生活経験の充実と社会性の育成に努める。	・小学部では、交流及び共同学習に積極的に取り組み、社会性を育てる。 ・中学部では、交流及び共同学習に取り組むとともに、将来の生活や生き方について、意識づけをさせる。 ・高等部では、交流及び共同学習、校外学習、就業・施設体験等を充実させ、生活経験の充実と社会性の育成に努める。	B	・小中の交流及び共同学習において、直接交流ではなく、リモート等で学校間の間接交流を行い、外部とのつながりを意識することができた。 ・就労施設体験等は、感染対策を施して実施し、生徒が将来のことについて具体的に考えるよい機会となった。 ・中間アンケートで、子供の社会性の向上について質問したところ、肯定的な意見が、保護者92%、職員98%であり、取り組みの成果が概ねみられるといえる。	A	・交流及び共同学習は学校外の同年代の児童生徒とのつながりを意識し、社会性を育む大切な場であるが、小、中、高それぞれの段階に応じた取り組みができたといえる。特に高等部では、佐商吹奏楽部と同じ高校生として対等の立場で交流することができ、社会性の育成につながった。 ・就労施設体験等は卒業後の進路にかかわる大切な場なので、今後も充実させていきたい。 ・最終アンケートでは、肯定的な意見が、保護者98%、職員95%であり、取り組みの成果が理解されているといえる。	A	・コロナ禍で社会体験活動の取り組みは、教職員の方々のご苦労があったと思う。児童生徒一人一人が地域社会の一員であるという意識付けが大事かと思う。 ・コロナ禍でもあり、外部との交流は大変難しいかと思うが、児童生徒にとって貴重な経験になると思うので、可能な限り継続して欲しい。	管理職
●健康・体づくり	●望ましい生活習慣の形成	○指先を意識した手洗いの指導ができていないと回答する保護者、職員が75%以上	・現在ある手洗い手順書を改良し、指先を意識した手洗いをすすよう職員へ呼びかけ児童生徒への指導を行う。 ・感染症予防に関する研修及び保健指導(動画視聴)を行い意識の向上を図る。 ・毎月のほけんだよりで校内の手洗いの様子を掲載し発行する。 ・毎月第3木曜日の職員朝礼を「感染症予防の日」とし、教職員の理解啓発を図る。	A	・職員の評価は100%、保護者の評価は98%と数値目標を上回った。 ・現在掲示している手順書を赤枠で囲ったり、注目の目印をつけたりして改良を行った。 ・手洗いチェッカーを使用した演習を行う職員研修を実施したところ、自己の手洗いを反省し重要性を感じたという感想が多く、意識の向上につながった。 ・全校朝会にて、手洗いについての手作り動画を視聴する機会を作った。 ・保健だより職員や生徒の手洗いの様子を掲載した。	A	・職員の評価が96%保護者の評価が97%と数値目標を大きく上回った。 ・感染症予防に関する職員研修、改良した手洗い手順書の校内掲示、正しい手洗いのポイントや手洗い風景写真などの手洗い特集を保健だよりに連年掲載、保健指導(手洗い動画視聴)などの取り組みが意識の向上につながったと思われる。	A	・コロナ禍でもあり、様々な取り組みは、衛生面で意識向上に繋がったと思われる。	保健	
	●効果的な地域支援に向けた特別支援学校のセンター的機能の充実	○校内研修や公開研修等を実施し、専門性の向上につながったと回答する職員が80%以上	・校外支援として巡回相談の実施、電話相談の対応を行う。校内支援として教育相談及び他校務分掌との連携協力を行う。 ・公開研修会の計画や案内をし、専門性向上への理解啓発を促す。	・研修の実施、校内支援の取り組みの結果、職員の評価は98%数値目標を上回った。 ・校内支援では、学校全体として職員の専門性の向上には、かなり個人差がある。 ・特別支援教育の専門性の底上げが今後の課題。	A	・公開研修後のアンケートでは、非常にためになった、もっと話が聞きたいなど、教職員として子どもの理解への意識が高まった内容が多く、職員の評価は98%と数値目標を上回った。	A	・巡回相談は大変である。金立特別支援学校だけならでできることだが、要望のあった行先の学校では、特別支援学校と異なる点も多く、そこの教育支援を考えると大変難しい。 ・専門性のキャリアアップを考えると、特別支援学校での勤務5年ではまだ難しい。	相談支援		
●業務改善・教職員の働き方改革の推進	●業務効率化の推進と時間外勤務時間の削減	●教育委員会規則に掲げる時間外勤務時間の上限を遵守 ○職員の時間外勤務時間の一月の平均時間が20時間以内(昨年度を維持) ○一月の平均時間が20時間以上の人数は一月平均30名以内(昨年度約44名) ○年休取得率が平均70%以上	・月1回の定時退勤日を完全実施する。 ・月3回の定時退勤推進日についても、定時退勤について推奨していく。 ・出勤システムについて、打刻等を定期的に行うことで各人の勤務状況を把握し、意識啓発を図る。 ・年休取得ができやすい行事計画の見直しを行い、啓発を図る。 ・業務分担を見直し、業務の効率化と標準化を図る。	B	・8月までの定時退勤日は完全実施できている。 ・8月までの一月の平均時間外勤務時間は、20時間以内となっている。(前10時間41分) ・時間外勤務が一月20時間以上の職員は一月平均約37名(24%)、45時間以上の職員は一月平均5名(3%)、 ・出勤システムについては、打刻等を定期的に行い自身の勤務状況を把握し意識するように月末以外でも随時呼びかけている。 ・下期に校務分掌機構の再編に向けて取り組む。	A	・定時退勤日は完全実施できている。 ・一月の平均時間外勤務時間は、20時間以内となっている。(前10時間41分) ・時間外勤務が一月20時間以上の職員は一月平均約22名(14%)、「達成できた」と応える職員は91%、45時間以上の職員は一月平均1名(1%) ・年休取得率が14日以上職員は85%超となっている。	A	・時間が明らかに減っていて、努力されている。 ・コロナが落ち着いてくると、またできることが増えて、職員の仕事が増えるのではないかと、ミスマッチになったところはそのままではないかと考える。 ・定期試験、通知表をやめる学校もある。一概にそれがいいとは言えないが、業務を減らしていく方向で進めてはどうかと考える。	管理職	

(2)本年度重点的に取り組む独自評価項目				中間評価		最終評価		学校関係者評価		主な担当者
評価項目	重点取組内容	成果指標 (数値目標)	具体的取組	進捗度 (評価)	進捗状況と見直し	達成度 (評価)	実施結果	評価	意見や提言	
○自立活動	○「自立活動」の指導の充実	○自立活動に関するアンケートにおいて、指導内容策定までの流れが理解でき、かつ授業に生かすことができた回答する職員が70%以上	・教職員に事前アンケートを行い、疑問点やニーズを把握したうえで、外部講師を招聘するなどし、自立活動に関する研修を行う。 ・授業や指導計画に関する自立活動相談会を定期的に行う。	A	・研修会や自立活動相談会に参加し、自立活動の指導について、指導内容策定までの流れを理解し、授業に生かしたと回答する教職員が94%と数値目標を上回った。今後も授業に生かすことのできる研修会等を実施する。	A	・教職員のニーズを踏まえた内容の研修が実施できた結果、研修会や自立活動相談会に参加し、自立活動の指導について、指導内容策定までの流れを理解し、授業に生かしたと回答する教職員が97%と前回よりさらに目標を上回った。	A	・教職員の方々は大変だと思うが、更なる自立活動の充実を期待している。 ・昨年度と比較すると、教職員、保護者ともに評価が上がっており、学校の努力が感じられた。	自立活動

5 総合評価・次年度への展望	<p>●…県共通 ○…学校独自 ◎…志を高める教育</p> <ul style="list-style-type: none"> 重点取組に対しての成果指標はどれも達成できており、各項目に対しての評価はすべてA評価となった。 肢体不自由単置校として、障害の程度が重い児童生徒が増えている中で、豊かな人生の実現や社会参加ができる児童生徒を育成するために、教職員一人一人の専門性をどのように高めていくかは、今後も学校としての大きな課題である。 コロナ禍ではあるが、校内での学部間をはじめ、地域とのつながりもとても重要であることから、様々な形で交流及び共同学習や校外学習、就業・施設体験等が行えるよう、引き続き模索していく必要がある。 今後も個々の児童生徒の実態に応じた支援機器やICT機器等の活用を推進するとともに、より一層教職員の指導力向上を図ることが必須となる。 	
----------------	---	--